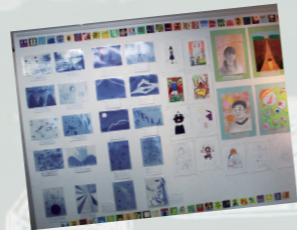


# 5750分展Ⅲ—ようこそ美術室!

2011年8月20日・21日・27日・28日 KAPL(コシガヤアートポイント・ラボ)  
9月17日 埼玉県立近代美術館



## 「5750分」これは何の数字でしょうか?

「5750分」は、中学校3年間の美術科の授業時間数の総合計(115時数×50分)です。〈5750分展〉は、その時間を展覧会の会期として、参加者や来場者とともに手を動かし、意見を出し合うことで改めて美術教育について考える機会です。

この取り組みは2009年から始まり、今回で3年目となります。〈5750分展Ⅲ〉は、美術教員だけではなく、職業や年齢も関係ない一般、大勢の方がたに美術教育について「みんなで考えようよ!」と呼びかけて続けてきました。このアクションを通して、私は自由に語り合う場面がたくさん生まれたいと考えます。しばしば、「美術はよく分からない」、「美術に関して自分は疎遠である」と感じている方に出会います。そういった方がたと一緒に考えてみたいという思いが着想となり、かつて自分が受けた美術の時間を出発点として、もう一度、美

術教育について考える場を創造したいという思いではじめたのが(5750分展)です。

第3回目となる今回は「ようこそ美術室!」と題して、3つの企画を立てました。

- (1)公開授業「美術の授業をもう一度受けませんか?」
- (2)座談会「美術を伝えること—美術教育のこれからを考える」
- (3)シンポジウム「5750分展Ⅲ—ようこそ美術室!」

公開授業と座談会は、越谷市にあるアートスペースKAPL(コシガヤアートポイント・ラボ)を会場としました。公開授業では来場者を前にして、現役の美術教員が普段に実践している授業をおこないました。中学教員による「自分のマークをつくろう!」(デザイン。講師:鈴木真里子さん)と「日本画に挑戦!」(水墨画。講師:甘楽紘子さん)、高校教員による「楽しい作品鑑賞」(講師:高濱均さ

ん)という3つの授業でした。一般の参加者も募り、当日は小学生から大人までの定員を超える、たくさんの方がたが集まりました。現在、おこなわれている美術教育を体験していただくことで、そこから生まれた意見や考えを伝え合うことができました。座談会では、現役美術教員はもちろん、アーティスト、大学教授、美術館学芸員、学生、NPO関係者、小・中学生、ふらっと立ち寄った地域の方などが参集して、それぞれの立場から多角的な意見を出し合う時間となりました(司会進行:田中康裕さん・松本清隆さん。ゲスト:山岡佐紀子さん・石塚良子さん・高貫結実乃さん)。

シンポジウムは埼玉県立近代美術館の講堂でおこなわれ、「学校を美術館に!」という『ながのアートプロジェクト』に取り組みされている中平千尋さんを招き、魅力的な美術教育の実践について話していただきました。

〈5750分展Ⅲ〉では他に、美術教員の作品

制作現場を公開する「公開アトリエ」とその関連ワークショップも実施しました。

この3年間の〈5750分展〉を通して、いままでも美術教育について考えることがなかったと

いう多くの方に、もう一度美術教育について考えてもらう機会をつくることができました。美術教育と一緒に考えていくなかで、学校現場がもつ魅力や課題点も浮き彫りになってきまし

た。今後も、この企画を通して生まれたネットワークを大切に維持・継続して、模索しつづけていきたいと思っています。

浅見俊哉(SMF協力委員)



## SMF+ダンスユニット〈転々〉 —風ヲツクル @新・港村(横浜)

2011年9月25日、夏の火照りの冷めやらぬ横浜の地で、SMFの活動紹介の一環としてダンスユニット〈転々〉は、押しかけダンスパフォーマンスをおこないました。



「新・港村」は「ヨコハマトリエンナーレ2011」の特別連携プログラムとして、8月6日~11月6日まで新港ピアに開村されていた小さな未来都市です。国内外のアーティストや企業、地域の活動団体が集う天井

の高い建物の中にSMFも紹介ブースを置き、会期中の一日だけ、盛大にアピールをするために皆で押しかけたという次第です。

〈転々〉がダンススペースに選んだ場所は、入り口を入ってすぐの「ゾーンA」でした。ここには2階程の高さの位置に回廊がめぐらされており、そこからは各ブースやスクールと呼ばれる教室を見まわることができます。この回廊は便宜上良いというだけでなく、全体を見渡せる解放感と、所々にそびえ立つ敷居による圧迫感を併せ持つ、不思議な魅力を備えたものでした。

ダンスプログラムは、「ことはじめ」という作品から始まりました。観客に交じって展示物を見ていたダンサーたちが、音楽の始まりと同時にその場で靴を脱ぎ棄て、「走っては伏せ」を繰り返しながら人の道を作っていくという、今年のSMFのキーワード「つながるHeart Art」を意識したものでした。続いて、横浜の雰囲気を漂わせる作品「彼女は」、回廊が静かな川に変容したかのような作品「無題」、港村の様子をイメージした作品「でもすまに」へと続きました。そして、妊娠7か月の女性が、胎動と松本秋則さんのサウンドオブジェ(ゾーンAに展示)に呼応して創作した作品「穴」、港村で受けたイメージを表した「遠い入口」へと続き、最後に、SMFが作りゆく風をイメージした作品「風」で幕を閉じました。

新・港村での押しかけダンスパフォーマンスが、SMFに集う人びとのひたむきな活動状況の一端を少しでも伝えることができたかどうか定かではありませんが、できうる限りを精一杯に表現した一日でした。

※同日におこなわれた「新・港村サウンドモニターワークショップ by SMF」については、〈音楽という表現の拡がりとともに〉に記載されています。(p.19)

藤井香(SMF運営委員)

